

こんぶ 滋賀県

しがけん

あるとき、子どもが海岸を歩いていて、海藻をひろいました。うちに持つてかえって、「これ、なんだろう」ときくと、父親が、

「ああ、これは『からかん』っていうもんだ」といいました。すると、母親が、「ちがいますよ。『ししらしん』ですよ」といいました。それを聞いたおばあさんが、「いやいや。これは『なまらまん』だよ」といいます。

三人は、「からかん」「ししらしん」「なまらまん」といはって、らちがあきました。そこで、お寺の和尚さんにきいてみると、

父親は、お寺へ出かけてといって、和尚さんに、

「これはなんというものですか」とききました。和尚さんは、

「さあ」といつて、首をかしげました。父親は、

「そんなら、これは『からかん』といふ」としておいてくださいな」といつて、二百文のお金を置いて帰つていきました。そして、うちに帰ると、みんなに、

「和尚さんは、『からかん』だつておつしやつたぞ」といいました。すると、母親が、「そんなはずはありません」といつて、お寺に行きました。けれどもやつぱり、和尚さんは、

「さあ」と首をかしげるばかりです。そこで、母親は、

「では、『ししらしん』といふ」としておいてくださいな」といつて、二百文置いて帰りました。そして、みんなに、

「和尚さんは『ししらしん』だつておつしやつたよ」といいました。すると、おばあさんが、みんなに、

「そんなはずはない」といつて、やつぱりお寺に行きました。そして、和尚さんに、「これは『なまらまん』ですよね」といつて、また一百文置いて帰りました。

「和尚さんは『なまらまん』だつておつしやつた」というと、また「からかん」「ししらしんだ」「なまらまんだ」といあつて、どうにもらちがあきません。みんなが、「和尚さんがたしかにそうおつしやつた」といはります。そこで、みんなでいつしょに

お寺に行くことにしました。

和尚さんに、

「いつたいどれがほんとうの名前なんですか」とたずねると、和尚さんはいいました。

「いやいや、これは、『からかん』でも『しらしん』でも『なまらまん』でもない。『三六百よろこんぶ』というもんじや」

おしまい。

原話：『昔話研究第十号』「高島郡昔話」／三元社刊

再話：村上郁